

## 彼を偲んで

札幌で演劇関係の人たちと付き合い始めたのは  
今から10年くらい前のことでした。彼の名前は  
その当時から伝説のようにたびたび耳に  
していました。その彼に昨年  
の八軒物語プロジェクトで初めてお目にかかり、  
幸運にも一緒に舞台をつくることができました。

突然のことでもあり、また外すことのできない予定が  
あったので、今日はその仕事の行きがけにお参りさせてもらいました。開式前の朝9時過ぎに  
到着すると、奥さんを囲んで一族関係者の皆さんが祭壇の前を整えたり何事かを話し合っ  
たりしていて、ちょっと近づきにくい感じでした。

間を見計らい祭壇の前の一団がばらけた時にすすすつと歩み寄ると、振り返りざまの奥  
さんが一瞬「あっ」と小さな声を上げました。その一声その一瞬の眼差しで私を憶えてくれて  
いることが分かりました。

「長谷川です。八軒物語でご一緒させてもらった・・・」

「はい」

「また一緒にやれると思っていたのに残念です。やりたかったんです・・・」

「はい、主人も・・・」

「お参りだけさせてください」

「どうぞ・・・」

写真の彼はパーターリン(八達嶺、万里の長城の名所)と思いき風景の前できりつと、し  
かし微かな笑みとともにこちらをまっすぐに見ていました。しばらくその眼光と向き合い線香を  
灯し手を合せ、翻って奥さんに香典を手渡し周囲の人たちに一礼して私は帰ってきました。

早春の陽光に照らされた車中に、カーラジオから何とも都合よく夏川りみの「涙そうそう」  
が流れてきました。生前の彼の姿を追いしました。病を圧して「すえ語り」の舞台制作に出かけ  
てきた彼。体調管理に気を遣い休憩時間はいつも目を閉じて休んでいた彼。しかし気のせ  
いか舞台に戻って少し元気になった彼。病を忘れたかのようにきびきびと演出していた彼。  
若者のように嬉しそうに楽しそうに打上げに加わっていた彼。

同年代の、まだそのような歳ではない彼が白血病に散ったことは忘れないでしょう。研究  
室に貼った「亘理渡来記すえ語り」のチラシに、しっかりと彼の名前がこう記されています。

「脚本／構成 萬年俊明」

2006年3月28日 長谷川聡

